



服部文庫  
117  
71



定丸をさみ捨遺



定丸をさみ捨遺  
 商家友とちと二人江戸ありし河津川と渡りて  
 商人懐たる金を落しければ其の河津川に於て  
 定丸と名をいひしやみ捨といふ男は是れを來りて若  
 物や為したるは其の感念を以てりいぬ書に主成守と  
 返り送り及急ぎ來りしをまじりて其のいはは是れ思ひ  
 成丸友あり男れ川の渡りて其の金を落しぬ我も其  
 成丸了ゆらんを洲畑へ振たりやその友の來り人種は  
 所も色もいふ中ふ友人來りては其の由成丸は是れ  
 思ひしよきさるるなりしは合わたりて送り合ひしは  
 いふよ果白洲畑をいひて其の川に存するを捨ちて





新... 今... 可... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...

... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...

... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...  
... 御... 御... 御...















































中より服卒て後りのふりりたるは今も前と出せまは  
伊予守と替へし家守の物見のまゝと伊豫守を  
りたる家守婦とわきあがり飛ぶる常之坊と  
もなり給ふいとをえんと信ふもどとや後の世  
明はういひまうた記ありと

此三字亦尚書卷

大久保が賢る忠節猶も執政より此何の法度此使を由許  
しこれ封状と出しむく御しにやとある事申下知  
りれい急かどふ一頁ふよりいし給はしけし先の事を  
封をとりつて是アふきとてえせきし物お是とえれ  
事納したる及右と明しめし封したる使を納し  
そのくの詞ありしう給はしけしとちうしめし

五節の事ありし頃此の妙はさるる夜のたのまれば  
事之何方の判紙と物々々の事此の御命の方と  
ありし御しあふいとゆきとゆきとゆきとゆきと  
とて返すもいれぬ感徳の深き御しぬかたき  
ありおしこれとておあり給ふ所のそと昔は色ハ  
重言の事あり序ありとゆきとゆきとゆきと  
いふそのまゝ西國の事とゆきとゆきとゆきと

和名記何の信度

とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
十宛送りたり或時別れし来しは指さし給ふ御し  
よりゆきとゆきと夜の月ふつとゆきとゆきとゆきと  
とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと









きりなりたる持たし掃部路ありかきりたるまに下りたるまに  
と通せしむるにむかひのふりたるまに下りたるまに  
多ふ百是なりたるまに下りたるまに下りたるまに  
用て神の神すなりたるまに下りたるまに下りたるまに  
風を上下に掃部路ありかきりたるまに下りたるまに  
右ありたるまに先君の神を祀りたるまに下りたるまに  
赤ぬりの草袋ありかきりたるまに下りたるまに下りたるまに  
なりたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
玉子相二重なるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
上下るとして下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
と下りたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに

の物語する人々人々痛みのるまに下りたるまに下りたるまに  
余が知事法とて下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
十位と神と下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
お橋少の忠清の執政の時下りたるまに下りたるまに  
因列ののりたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
それら下りたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
せのわたりたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
司の老女殿ののりたるまに下りたるまに下りたるまに  
老女を討つたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
下りたるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに  
事たるまに下りたるまに下りたるまに下りたるまに







友とありぬらうとていふはもてしめられぬは力  
及の難くいりてんをりうあふ一人を命りては海客の由  
りひるん此は舟の世山あり五あふ一人を命りては海客の由  
聖者ゆり世を行てん中とす切ふ山あり我ををん  
妻と浪浪をせん事お言とゆりいふ言をき物うけ  
是とあまの言に依りて我を又の漂泊する返渡り思  
夜の目より見ぬし世に依りて居る路はまじりてあふ  
いふと大道に於て色澤りて此の事お来るまじりてあふ  
りていふと中絶するたひに我をりて少くもいふのけり  
友をりていふと倒れぬるやうにいふとあふりていふ  
と悔りていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふ

そ夜にそうれぬれぬとてわの妻梅よりそ世中を言ふての家  
身を賣くそ強と文と流るそ徳と格装の料とあふりてい  
此六とそ丹波と来りて春長と二年居りてあふりていふとあふりてい  
予の方と来りてあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
あふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
ふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
浪花をゆりて所を言ふ皆人おとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
あふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
うやうとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
戀愛思のわらうとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい  
既いあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりていふとあふりてい







夫のゆゑにその世の世を違へてはたけのらゝるまきけし我  
もその遠れはるゝかゝるゝ文章を讀みしはつゝもふ常は海  
鏡套のわづ村老の名人を尋ねしは信を度と法に  
て多量なるまかゝるゝつゝもやまゝ村老の母懐妊しける  
程もをくゝと素同ししは和音のたけしゝと左きゝ等し  
かりゆゑ云々村老は母のたけしゝと南のりゝ行を返は  
多やゝゝその湯湯せしは我中もゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
者もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
志のまけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
おまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後ゆゑに海鏡懐くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
と年月あれゆゑにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
かゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
かゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
流と流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
松崎のまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
官廳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

































はふ小思らと耐とくははく終後の山々の目ふきあり  
目音ぬきの親あふとくを教ふを  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき

二字朱意の注

うは終業のるる終のそよ、いりあしそをくなくはくはは  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて我子を死さす  
あはく世中を苦むればは教旨の終とて一服の恙なく西京  
あやせらるるくゆとせればはあまの死に  
子たの志はさいりすつき行目あはれと母と事ゆき













はるるを履し踏む幸のゆへにすらにせしむりしれは経例に  
たふし然りし言をばしなむすりしれはあつしるのたふり  
あまのりなふしきこもる然るはまのりなふつきのりなふ  
室の中へのぬまのまよひのよまをふしあつしるのたふし  
何れをまよひしと敵とせしむるはまのりなふつきのりなふ  
思ひのふぬしあつしるはまのりなふつきのりなふ  
陽のまよひなむしきまのりなふつきのりなふ  
そは珍珍をたふしるのたふしつひりしあつしるのたふし  
無のゆへにまよひし福のゆへにまよひし福のゆへに  
まよひし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし  
雑言と此のゆへにまよひし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし

せしむるのゆへにまよひし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし  
たふし然りし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし  
あまのりなふしきこもる然るはまのりなふつきのりなふ  
室の中へのぬまのまよひのよまをふしあつしるのたふし  
何れをまよひしと敵とせしむるはまのりなふつきのりなふ  
思ひのふぬしあつしるはまのりなふつきのりなふ  
陽のまよひなむしきまのりなふつきのりなふ  
そは珍珍をたふしるのたふしつひりしあつしるのたふし  
無のゆへにまよひし福のゆへにまよひし福のゆへに  
まよひし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし  
雑言と此のゆへにまよひし言をばしなむすりしれはあつしるのたふし













去るは乃始くく一向好む事すをそと叱られ其の面目  
を失ゆりたりとれは士とてさうく是づく一風と建非  
子や来りたりとて是を思ふの御みなり物れは其の徳作  
其及そとる知るとは人を有しとて也は其の  
まぬさゆのりか非すと固く辨しそはさりたり或は  
合川は川流りあは江人ゆき其徳也と人の善徳  
うけさるしとすもたやとてさうくはつさかつて者  
徳とて去りくさるれは其の富と人の力と及ぶのなりとて  
如く獨ありとて一をさるる徳とてさうくは初の花と  
つといて人徳とてさうくは内より戸とてさうくは  
人といれすも人といはるるゆり也とてさうくは内と

春とせざるし一徳とすをおとせしとてはかきふ死を其れり  
す愈々一をかくのやくなりとてすつとてさうくは徳と  
とてさうくは徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
海とて自然の及り累々とてさうくは徳とてさうくは  
氷とてさうくは徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
浅き川に入りしは徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
京の火災と堀川邊の焼りゆは仁徳と堀川の中の木と  
並に徳と徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
ゆきと徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
可くは徳とてさうくは徳とてさうくは徳と  
死の先徳一川ゆれとて徳とてさうくは徳と

人れ一人の流り

故高田屋の素直美成屋にりて之海を若子も定利能信  
此例は仕下り物長を性急りて何れも女討かゝる者  
少りし事なる時このまわとくつり事を四言りてらるゝ交毎  
よ物とをくもく此すか例とく流る世をそのとらり我  
玉にるわふも何ゆかゝる友れく味り勇氣流物か誓  
ふに静るなる事なりり色を大火とく但形も火のうらぬき  
時或人静るるも何れはたれかいていゝとるのりれさる  
しとるも神女とるか静るにいと物静か物流の中かか  
る田代の院曾流能名しと是らるゝ我友の流り  
他家のり士と田所ふなり在る是れ乃かゝるゝ羽のさる

と酒の流りて何れもさるゝ流る流るを流りてあか  
るゝ入用なる物流るを流りて流る流る流るの流  
るのさるゝ流りて何れもあかゝるゝ流るの流る  
男とるゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
流るゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
ゆくゝとるゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
娘せんゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
何れも流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
けとるゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
流るゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る  
さるゝの流るを流りて何れもさるゝ流るの流る



世に到るなり多ふなりと

松平紅毛の伝席

隆山の先般中症三年やすいし治し治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

二十朱房注

石川通江の伝席下

傳のあつとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

人治るとすいし治りしをすま

世に多し子の人唐子の女子三人とすや一遺言し治りし

阿部豊後守

一 名をうりしり寛保三年の以半條を終りぬ

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭

酒平雅樂頭









鯖江屋の多海を飲せしれ一は中か村の氏末とて酒  
のり云平か及りし海くふ催促すれと酒しと事  
我未困窮細可力な一此上をんつと首さるる  
後意すしきもやしなり一及後更らまひくさぬしり  
はりれしるゆつしと忍くしりらまは腰の中より  
われれ事りかちとてはるやすし細き人ものこと  
な美のしるるかあは海や一及者ふなりけりて  
わしふれし我は後よりしれれ村中の氏と親老とふ  
せうれがもまなすは末とのより細きははすちり  
酒をきかきふちりてきし細きははすちり  
とめしひもふふさけりわあめりしと略しり

洞くし先志ししと違ふしと村中の極とてしと忍ゆ  
一と申の材の氏とて呼わづめあひぬ下しと白先体  
いあすしきとてうち解流りあひしととせは一とあふ  
は佛堂とて一向宗の言佛あまを扱ふしとてや  
中は材を一向宗なりけりなす我も同宗なりおる事  
ありはるをそとて白をそとて次の日より材の色長き  
無百姓とてしとあはるるまあのかくは物は我もは  
末との酒友なりしとてはとてしと産業とてしと  
しと君の酒友なりしとてはとてしと細きとては  
あはるるはとてしとあはるるはとてしと  
とてしとあはるるはとてしとあはるるはとてしと











Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be crossed out or heavily faded. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be crossed out or heavily faded. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be crossed out or heavily faded.

